

宮廷派としての《カール大帝福音書》とその位置付け

清水 悠 佑

“Evangeliar Karls des Großen” in the Context of The Court School of Charlemagne

Yusuke SHIMIZU

Abstract

The manuscript “Evangeliar Karls des Großen” (München, Ludwig-Maximilians Uni. Bibl., Ms. Cim. 1) is one of the Carolingian Gospels, made around 800 CE, but it includes no portrait of the Evangelists, only initial illuminations. Based on its style of illuminations and codicological details, the manuscript has a close relationship with the Court School of Charlemagne, although the attribution of the manuscript to the Court School is controversial. From the viewpoint of Carolingian art history, the manuscript is obviously important; however, it has not been sufficiently discussed in detail to date.

This study presents two discussions. First, to confirm the attribution of the manuscript to the Court School. Second, through a comparison of illuminations and scripts, to consider it as a missing link not only between two tendencies of manuscripts of the Court School, the luxurious and the moderate manuscripts, but also between Fulda manuscripts.

The initial illumination at the beginning of Mark's Gospel, depicting three medallions with biblical figures, is also found in other manuscripts of the Court School in the same place except for ms. Arsenal 599. The initial illumination with figural medallions seems to be particularly similar to ms. Harley 2788. Comparing letters, almost all letters of the Court School are written in gold, while those of “Evangeliar Karls des Großen” are partially written in gold, that is, only the first column of the initial page. Despite this difference, the manuscript can be characterized as having a relationship with both tendencies of the Court School and can be attributed to the Group.

In addition, taking the manuscript's illuminated letters and initial illuminations into consideration, the Fulda manuscripts show obvious similarity.

Based on these facts, this study suggests that the manuscript is the missing link between both the tendency of the Court School and a prototype of the Fulda Manuscript's model in the Court School.

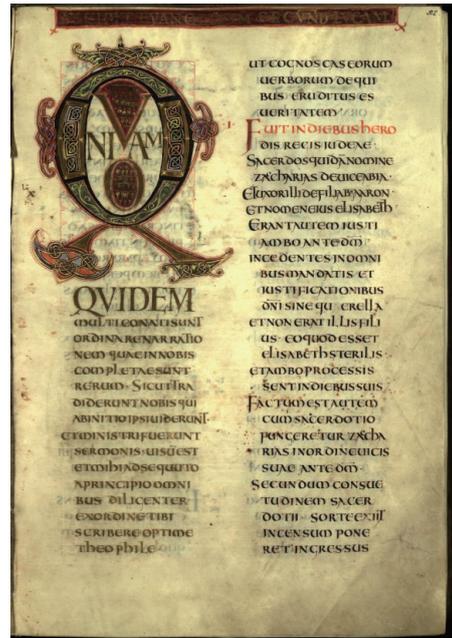
はじめに

現在ミュンヘンのルートヴィヒ・マクシミリアン大学（通称ミュンヘン大学）附属図書館には《カール大帝福音書》（Evangeliar Karls des Großen、以下「当写本」）⁽¹⁾【図1、2】と呼ばれる写本が所蔵されている。当写本は9世紀初頭までには制作されたと考えられ、装飾の類似性などの観点から、「宮廷派」と呼ばれる、カール大帝（カロルス・マグヌス、シャルルマーニュ）を中心とした宮廷によって制作がなされたとされている写本グループとの関係性が指摘されるものである。

写本の呼び名や、王権と関わりを持つとされる制作背景からも当写本の重要性は、とりわけカロリング期の宮廷美術の観点から明らかであるにもかかわらず、他の写本と比べ研究が進んでいないように思われる。また、



【図1】カール大帝福音書、マルコ冒頭イニシアル



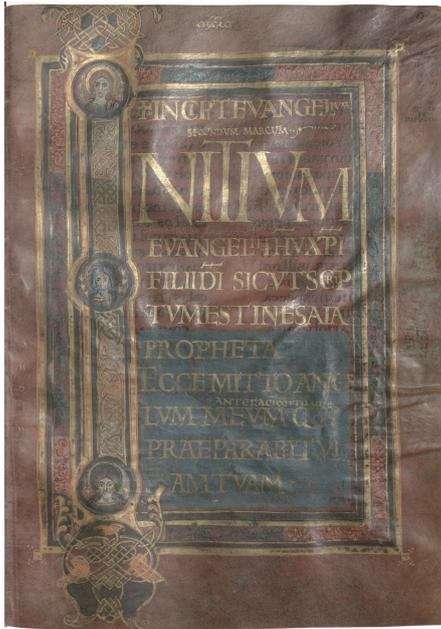
【図2】カール大帝福音書、ルカ冒頭イニシアル

当写本においては宮廷派写本と類似が見られる一方、宮廷派のみでは説明ができない差異も認められ、非常に興味深い。本稿の目的は当写本に注目し、宮廷派の装飾やテキストと比較することで、宮廷派への帰属を確認した後に、宮廷派の発展史内でどのような位置づけが可能かを検討する点にある。この試みを通じて、従来注目を向けられることが少なかった当写本の重要性を確認し、宮廷派内のミッシングリンクとなりうる可能性を示したい。

宮廷派

初めに当写本と関係が深いとされる宮廷派⁽²⁾と呼ばれる写本群について概観する。宮廷派は8世紀後半から9世紀初頭にかけて、カール大帝の宮廷周辺で制作されたとされる写本群である。現在一般的に認められているもので8冊と1断片⁽³⁾が数えられるが、失われた写本も多いと考えられている。典礼用福音書写本1冊、福音書6冊、詩篇1冊が現存する。具体的には以下の通りである。

- (1) München, Ludwig-Maximilians Uni. Bibl., Ms. Cim. 1. 当写本が言及されているものを以下に記す。Mütherich, Florentine, "Die Buchmalerei am Hofe Karls des Grossen", *Karolingische Kunst*, (1965), pp. 9-53 や、同年にヨーロッパ会議後援の下、アーヘンで開催されたカロリング美術の展覧会である「カール大帝：作品と影響」("Karl der Grosse. Werk und Wirkung") のカタログにおいても当写本が触れられている。(Weidemann, Kurt et al., *Karl der Grosse. Werk und Wirkung*, Aachen, (1965), p. 257) 近年では Westphal, Stephanie, "Karls Erbe auf den Spuren der Hofschl-Handschriften in Karolingischer Zeit", *Karls Kunst*, (2014), pp. 131-153 において当写本が、議論中とされつつも宮廷派として数えられている。当写本はミュンヘン大学図書館によって全頁がウェブ上で閲覧可能である。"Open Access LMU", (<https://epub.uni-muenchen.de/10622/>).
- (2) 宮廷派に関しては現在に至るまで多くの研究がなされている。以下に代表的なものをいくつか挙げる。Boeckler, Albert, *Abendländische Miniaturen bis zum Ausgang der romanischen Zeit*, Berlin, 1930.; Id. "Die Evangelistenbilder der Adagruppe", *Münchener Jahrbuch der Bildenden Kunst*, Dritte Folge, 3/4(1952/53), pp. 121-144.; Brenk, Beat, "Schriftlichkeit und Bildlichkeit in der Hofschule Karls d. Gr.", *Settimane di studio del Centro Italiano di Studi sull' Alto Medioevo. Centro Italiano di Studi sull' Alto Medioevo*, (1994), pp. 631-682.; Denzinger, Götz, "Die Handschriften der Hofschule Karls des Großen. Bemerkungen zu ihrem Bildschmuck und ihrer Ornamentik", *Karls Kunst*, (2014), pp. 109-129.; Koehler, Wilhelm, *Die karolingischen Miniaturen. II. Die Hofschule Karls des Großen*, Berlin, 1958.; Mütherich, art. cit. (n. 1).; Rosenbaum, Elizabeth, "The Evangelist Portraits of the Ada School and Their Models", *Art Bulletin*, 38 (1956), pp. 81-90.
- (3) これらに加えて、F・ミューテリヒは、Mütherich, F., "Die Erneuerung der Buchmalerei am Hof Karls des Großen", *Studies in Carolingian Manuscript Illumination*, (2004), p. 4 において現存はしないものの、后妃ヒルデガルドの死に際して豪華な装飾が施された《ヒルデガルドの黄金詩篇》が制作され、15世紀まではサン・ドニ修道院に存在していたことを指摘している。



【図3】 アブヴィル福音書、マルコ冒頭イニシアル



【図4】 ソワッソン福音書、マルコ冒頭イニシアル

- ・《ゴデスカルクの^{レフシヨナリ}典礼用福音書写本》⁽⁴⁾
- ・《ダゲルフ詩篇》⁽⁵⁾
- ・《アーセナル 599 番写本》⁽⁶⁾
- ・《アダ福音書》⁽⁷⁾ (以下制作年代が遡る方を《アダ本 A》、新しい方を《アダ本 B》)
- ・《アブヴィル福音書》⁽⁸⁾ 【図3】
- ・《ハーレーの黄金福音書》⁽⁹⁾ (以下《ハーレー福音書》) 【図6】
- ・《ソワッソンのサン・メダール福音書》⁽¹⁰⁾ 【図4、5】
- ・《ロルシュ福音書》⁽¹¹⁾
- ・「ザカリアへのお告げ」断片⁽¹²⁾

いずれも宮廷と非常に近い関係性が指摘され、その中にはカール大帝が直接注文したとされる写本も存在する。それにも拘わらず、制作に関する情報の多くは未だに議論がなされるどころであり、不明点が多い。というのも、宮廷派写本が宮廷付属のスクリプトリウムで制作されたのか、もしくは王国内の有力な各修道院で別個に制作されたのかということも正確には明らかになっていない。今日までアーヘンをはじめ、トリアやメッス、ロルシュ、マインツ等が制作地として挙げられてきたが、いずれも決定的ではないとされている⁽¹³⁾。制作年が具体的に特定可能な作例もほぼ無く、《ゴデスカルクの典礼用福音書写本》と《ダゲルフ詩篇》は献

(4) Paris, BnF., Ms. Lat. 1203. 781-83 年制作。

(5) Wien, ÖNB., Ms. 1861. 782-95 制作。

(6) Paris, Bibl. Arsenal, Ms. 599. 8 世紀末制作。

(7) Trier, StB., HS. 22. 790 年頃 (アダ本 A) / 追加部分 (アダ本 B) は 9 世紀初頭制作。主に四福音書記者像等が加えられた。

(8) Abbeville, Bibl. de la Ville, MS. 4 (1). 8 世紀末制作。

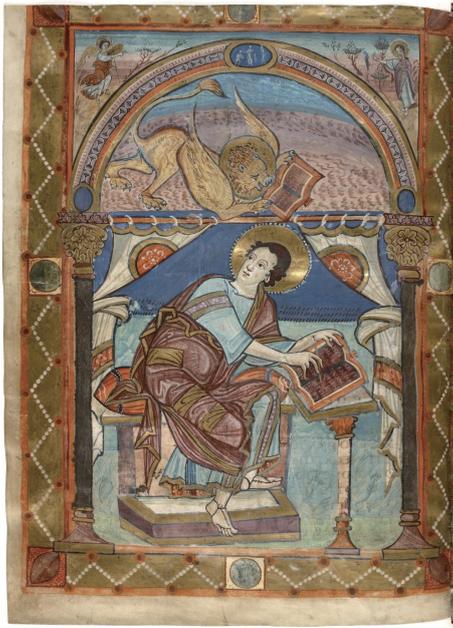
(9) London, Brit. Libr., Ms. Harl. 2788. 9 世紀初頭制作。

(10) Paris, BnF., Ms. Lat. 8850. 9 世紀初頭制作。

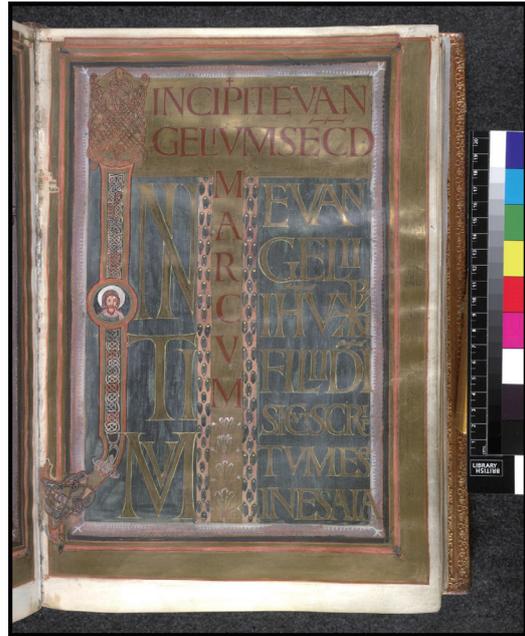
(11) Bucharest, Bibl. Nat., Ms. R II 1; Rom, Vat. Libr., Ms. Pal. Lat. 50. 9 世紀初頭制作。

(12) London, Brit. Libr., Cotton Claudius B. V, fol. 134v. W・ケーラーは大英図書館のコットンコレクションの写本内に貼り付けられている「ザカリアへのお告げ」場面の挿絵がカロリング期の失われた宮廷派写本から切り抜かれたものであるとした。詳しくは Koehler, W., "An Illustrated Evangelistary of the Ada School and Its Model", *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 15 (1952), pp. 48-66.

(13) Koehler, *op. cit.* (n. 2), p. 11.



【図5】ソワッソン福音書、福音書記者マルコ



【図6】ハーレー福音書、マルコ冒頭イニシアル

呈文と歴史的状況から具体的な制作年が限定されている⁽¹⁴⁾。また、W・ケーラーが福音書のクロノロジーを、テキスト批判による研究を基に大まかに導き出しているが詳細はここでは省略する⁽¹⁵⁾。

宮廷派の各写本に共通する特徴として、多くは高価な素材を用いた豪華で豊かな装飾が施される点が挙げられる。特にケルト系島嶼美術や、古代末期美術、ラヴェンナ美術等の影響が見られる様々な装飾が、ページを囲む方形枠やイニシアルを中心に施される。また金文字による筆記、一部の写本に見られる紫羊皮紙の使用など、素材自体も高価なものを使用している。

人物像は福音書に描かれ、とりわけ福音書記者像【図5】は装飾性が非常に豊かな衣襷や、人体各部の三次元性、奥行きが意識されている表現、細かい陰影表現が見られる等、前時代の人物像とは大きく異なる⁽¹⁶⁾。装飾と同様、ラヴェンナ⁽¹⁷⁾を中心としたビザンティン美術やローマ、ランゴバルドなどの美術、さらには古代末期美術の強い影響が指摘される⁽¹⁸⁾。宮廷派写本は、カール大帝によって推進された「カロリング・ルネサンス」⁽¹⁹⁾と呼ばれる、刷新運動及び文化活動と結び付けられて捉えられることが多い。以上から宮廷派は古代末

(14) 例えば Koehler, *op. cit.* (n. 2), p. 22 によると、《ゴデスカルクの典礼用福音書》は献呈詩に 781 年制作開始が言及されており、783 年 4 月 30 日の后妃ヒルデガルトの死の前には完成したとされる。E・ローゼンバウムは《ゴデスカルクの典礼用福音書写本》、《アブヴィル福音書》、《アダ福音書》の 3 冊を宮廷派の原形的な写本とみなし、《ソワッソン福音書》や《ロルシュ福音書》を新傾向写本とみなしている。詳しくは Rosenbaum, *art. cit.*, (n. 2), p. 90. ゴデスカルクの献呈文はオンラインで閲覧可能である。"dMGH Beta, MGH Poetae 1", <https://www.dmgf.de/mgh_poetae_1/#page/93/mode/1up>.

(15) Koehler, *op. cit.* (n. 2), p. 13-16.

(16) 福音書記者像における着衣表現は、越宏一『ラヴェンナのモザイク芸術』中央公論美術出版、2016 年 p. 87 で言及される、衣服と身体の「実り豊かな敵対関係」を持つギリシア式の着衣像の特徴が不完全ながら見られるといえるだろう。同じく宮廷周辺で制作がされたとされる「新宮廷派」（アーヘン宮殿派）の挿絵ではこの特徴が一層顕著である。

(17) カール大帝は遺言の中で、各都市への慈悲の施しとしての遺産分配に言及する際に、ラヴェンナをローマに次ぐ 2 番目に挙げていることから同都市の重要性が窺える。(エインハルドゥス、ノトケルス『カロルス大帝伝』國原吉之助訳、筑摩書房、1988 年、p. 45)

(18) 古代末期や初期キリスト教美術の作例がカロリング期の人々によって参照可能であったことは既に指摘がなされている。例えば《ウェルギリウス・ウァティカヌス》(Rome, Vat. Ms. Lat. 3225) は 9 世紀にはトゥールに所蔵されていたとされる。(辻佐保子『世界美術大全集 7』「序 写本装飾と工芸の時空を超えた伝達と交流」小学館、1997、p. 308) また L・ニーズは《プロピヤヌスの二連版》がカロリング期にはヴェルダンの修道院に所蔵されていたとしている。(Nees, Lawrence, *Early Medieval Art*, New York, 2002, p. 169) カロリング期に《フィロカルスの暦》に代表される、古代末期美術作品のコピーが多く残されたことも、実際の地中海美術との距離の近さを示している。

期やビザンティン等の地中海美術を手本としつつ、インスラーや、ゲルマンの所謂バルバロイの美術、さらに宮廷知識人によって展開された神学の要素をも組み込んだ、カロリング宮廷独自の芸術を体現していると考えられよう⁽²⁰⁾。

筆者は現存する宮廷派写本は装飾傾向によって大きく2つのグループが可能であると考え。すなわち、人物像や方形枠装飾が描かれ、装飾性が豊かである写本、及び挿絵や装飾枠が描かれず、一部ページを除き装飾が少ない写本である。本稿では便宜上、前者を「豪華本」、後者を余白が多いという意味で「余白本」と呼ぶ。具体的に、豪華本では各福音書の冒頭に装飾枠で囲まれた福音書記者像やイニシアル、テキストに関連する副次的な挿絵などが描かれ、テキスト本文も古代末期の象牙二連板のような印象を与える方形の装飾枠に囲まれており、一貫して重厚かつ絢爛な印象を与える装飾が描かれる。《ゴデスカルクの典礼用福音書写本》や《アブヴィル福音書》、《アダ本B》、《ハーレー福音書》、《ソワッソン福音書》、《ロルシュ福音書》がこのグループに属する。一方の余白本は、福音書記者像などの人物像は描かれないうえに、テキスト本文も装飾枠で囲まれておらず、一部イニシアルや対観表が装飾として用いられるのみで簡潔さと余白部が目立つ。《ダゲルフ詩篇》や《アーセナル 599 番》、《アダ本A》を余白本グループとして考える。

文字に関しては、基本的に豪華本と余白本で使用されている字体が異なる。しかし、双方とも各主題の冒頭では、古代風の大文字であるカピタリスを用い、本文は金文字で書かれているという点ではおおむね共通している。

以上カール大帝宮廷派について概観した。宮廷を中心として前時代に類を見ない壮麗な写本が制作されたが、814年のカール大帝の死をもって活動を終え、宮廷派写本も各修道院に分散したとされる。

《カール大帝福音書》

当写本は約 326mm × 223mm の比較的大型な福音書であり、パレオグラフィーの観点から制作年は 800 年頃に帰されている⁽²¹⁾。テキストはページ当たり 31 行のダブル・コラムで書かれている。後に追加されたと思われる部分は、筆跡が他と異なり、マインツとの関係を示すとされ、9 世紀にはマインツに存在していたとの指摘があるが⁽²²⁾、正確な制作地は不明である。現存フォリオは 137 葉が数えられているものの、欠損が著しく、対観表⁽²³⁾やマタイ福音書の前半、ヨハネ福音書の冒頭は失われている。当写本はマタイ福音書 22: 39 の途中である "diliges proximum tuum sicut te ipsum..." から始まっている。

来歴に関しても不明な点が多い。1600 年頃以降からインゴルシュタット大学図書館の蔵書目録に初めて記録され、1800 年にはランツフートへ、1826 年から現在のミュンヘン大学図書館に所蔵されている。しかし、1600 年頃以前の所有者に関しては不明である。

当写本の内容は以下の通りである。

fols. 1r -13r マタイ福音書 (22: 39 以下)

fols. 13r -13v マルコ福音書序文

fols. 14r -14v マルコ福音書章題リスト (Capitula)

(19) 789 年に発布された一般訓令の第 72 条はしばしばカロリング・ルネサンスの精神を表象するものとして言及される。(五十嵐修『王国・教会・帝国 カール大帝期の王権と国家』知泉書館、2010 年、pp. 158-59)

(20) 神学に関しては、例えば第 2 ニカイア公会議決議の誤訳が伝わったことを背景として強調されたイメージに対する文字の優位性、同時期のヒスパニアにおけるキリスト養子論への反駁といった要素が宮廷派には見られるとされる。詳しくは Brenk, art. cit. (n. 2).; Saurma-Jeltsch, Lieselotte, E., "Das Bild in der Worttheologie Karls des Grossen zur Christologie in karolingischen Miniaturen", *Kultur und Theologie*, (1997), pp. 635-675.

(21) Mütherich, art. cit. (n. 1), p. 25.

(22) Mütherich, art. cit. (n. 1), p.25. 以前は 9 世紀中頃にフルダで活動していたスクリプトリウムでの制作が想定されていたが、800 年頃という制作年の推定を根拠に後期フルダ写本とは異なるとしている。

(23) 存在した証拠はないが、同時代の他の福音書の傾向から、オリジナルは対観表を含んでいたと考えられる。同様にヒエロニムスによる序文も存在していたと考える。

- fol. 15r-48v マルコ福音書 (fol. 15r. マルコ冒頭イニシアル 【図 1】)
 fol. 49r-49v ルカ福音書序文
 fol. 50r-51v ルカ福音書章題リスト (Capitula)
 fol. 52r-95r ルカ福音書 (fol. 52r. ルカ冒頭イニシアル 【図 2】)
 fol. 95r-95v ヨハネ福音書序文
 fol. 96r-96v ヨハネ福音書章題リスト (Capitula)
 fol. 97r-137r ヨハネ福音書

当写本の宮廷派への帰属は現在でも議論がなされており、広く認められているわけではなく⁽²⁴⁾、宮廷派への積極的な帰属は行われていない。少なくとも制作がカール大帝の宮廷と近いということは間違いないだろう。しかし、中央である宮廷と近い関係にあり、現存数が多くはない宮廷派との関係も指摘されるという当写本の重要性に比して注目を浴びる機会は多くはない。F・ミューテリヒは当写本の様式から宮廷派との非常に密接な関係を指摘し、当写本が宮廷によって改良されたテキストを普及させる役割を担っている可能性について言及した⁽²⁵⁾。少なくとも現存している部分に限っては、各福音書はクアテルニオンで綴じられており、個々のページにおいてはルーリングが丁寧に処理されている点を指摘し、写本としての質の高さも宮廷派との関連を示唆する根拠としている⁽²⁶⁾。

装飾についてはマルコ及びルカ福音書の冒頭イニシアルのみ現存し、これらはいずれも《ハーレー福音書》のイニシアルと同じ高さであると指摘がある⁽²⁷⁾。以下にそれぞれのイニシアルについて記述する。

マルコ福音書の冒頭イニシアルは INI 【図 1】で構成され、鍵のような形状をしている。I はおおよそ全ページ大の高さがあり、コラムの外側に置かれる。上下の末端は組紐文様、特に上部は動物組紐による装飾も施される。イニシアルの帯状の部分は枠によって区別がされ、それぞれ組紐文や幾何学文で充填されている。イニシアルは金をはじめ、黄や茶がかかった赤、青などによって彩色されている。人物の胸像が描かれた3つのメダイオンがIの上下及び中央に計3つ配されており、上から白髪で髯を備えた初老の人物、髯を備えているが白髪ではない壮年の人物、最後に髯のない若年の人物が描かれている。NIは2文字で1つの装飾単位となっており、大型のイニシアルIの半分ほどの大きさで上半分に並置されている。横幅はほぼコラム幅程度である。Nの空隙には赤地にアカンサスが描かれ、あるいは緑の葉状のモチーフによる装飾が用いられている。

ルカ福音書の冒頭イニシアル【図 2】はページ四分の一ほどの大きさのQと、内部のVONIAMで構成される。Qは組紐文様やアカンサス文様を用いて、外部及び文字部に装飾が施されている。内部空間にはVOが縦に配置され、その2文字の開口部及び内部に赤地に細かく鍵や葉のようなモチーフの装飾がなされている。マルコ、ルカのいずれにおいても、イニシアルが描かれるコラム内の文字は金で書かれている。

以上のような特徴を持つ当写本と宮廷派写本を比較し、両者に見られる共通点と相違点を述べる。宮廷派との関係を示す具体的な例を記述するにあたり、本稿では写本の文字的及び装飾的の2つの側面からアプローチを行う。

まずは文字的な要素の検討から行おう。当写本は各福音書の前にプリスキアヌスによる註解が序文として用いられている。このプリスキアヌス序文は他の宮廷派福音書すべてに採用されており、共通する内容を示している⁽²⁸⁾。文字に関しては、冒頭部分にカピタリスが用いられる点や、本文の字体も宮廷派豪華本で用いられるものと共通している。

²⁴ 管見の限り、帰属を正面から反対する研究は見受けられない。しかし、やや古い書籍ではあるが、Koehler, *op. cit.* (n. 2)では取り上げられておらず、Weidemann, et al., *op. cit.* (n. 1), p. 257では"Hofschule Karls d. Gr. (?)"と宮廷派への帰属の明言は避けている。

²⁵ Mütherich, art. cit. (n. 1), p. 26. 同時に当写本が宮廷派のミッシングリンクであるかについては検討の価値があるとしている。

²⁶ Mütherich, art. cit. (n. 1), p. 25.

²⁷ Nordenfalk, Carl, in Weidemann, et al., *op. cit.* (n. 1), p. 257. しかし、特にルカ冒頭イニシアルに関しては一方はコラム内に収まるイニシアルで、もう一方はページ中央に描かれており、若干の疑問が残る。

字体の豪華本との一致が確認できる一方で、金文字の使用に関しては差異がある。宮廷派のテキストは豪華本、余白本問わず基本的にほぼすべて金文字であるが、当写本は冒頭のイニシャルの配されるコラムを除き黒、あるいは赤で字が書かれる点である²⁹⁾。金の使用頻度の減少は、イニシャル装飾においても確認できる。例としてマルコ福音書イニシャルIにおいて、帯状部分の分割された装飾空間の枠が黄色で着彩されているものがある³⁰⁾。

装飾の検討に移る。字体の共通点を持つ豪華本のテキストは装飾方形枠で囲まれるが、当写本は枠で囲まれておらず余白となっており、余白本と類似している。一方でマルコ及びルカ冒頭に挿入される当写本のイニシャル装飾は、組紐文様などによる豪華な装飾という点で宮廷派写本と類似している。とりわけマルコ冒頭におけるIの胸像メダイヨンは豪華本グループと非常に類似しており、同様の装飾が宮廷派内では《アブヴィル福音書》【図3】、《ハーレー福音書》【図6】、及び《ソワッソン福音書》【図4】においても確認できる。

メダイヨンの数の一致、大文字Iがまっすぐと伸び、上下端に組紐文様、上端の動物組紐などから、イニシャル全体で見ると、とりわけ《アブヴィル福音書》のマルコ冒頭イニシャルと当写本のそれは類似している。メダイヨン人物像の同定に関しては、現在に至るまで多くの議論がなされ、様々な案があるが結論が出ているとは言い難い。本稿では当写本の3人の同定は本論から逸脱するため行わないが、メダイヨンの数と描かれている人物の容貌のパターンの一致から、B・ブレンクが《アブヴィル福音書》において提案した、キリスト、イザヤ、洗礼者ヨハネ³¹⁾と仮定したい。すなわち当写本では上からイザヤ、洗礼者ヨハネ、キリストであると³²⁾。この3人は福音書冒頭で名前が挙がることから、最も明快な人物選択であろう。

これを踏まえ、当写本と他の写本のイニシャルにおける人物の様式について比較を行う。当写本に描かれる人物は、3人とも共通して濃い紺青の地に円形の白いニンブスを備えた姿で描かれており、全員、特に上下2人は向かって右側、すなわちテキストの方向に視線と顔をやや向けている。当写本を《アブヴィル福音書》と比較すると、面貌や髪の描き方など様式的には類似しているが、後者は赤紫の地に描かれ、金色のニンブスを伴っている。視線の差異も確認できる。

筆者は当写本のメダイヨンの人物像と最も類似しているのは《ハーレー福音書》【図7】であると考えている。メダイヨンは中央に1つのみであるが、紺青で着彩された地、白色のニンブス、顔を向かって右側にやや向けている様子など、細かな点まで類似している。

様式的な類似に加え、C・ノルデンファルクは当写本のマルコ及びルカのイニシャル装飾は《ハーレー福音書》のイニシャル装飾とほぼ同じ高さを示していると述べている（註27参照）。F・ミューテリヒはメダイヨン内の人物像の左右に存在する宝石のようなモチーフによる装飾も《ハーレー福音書》の下絵にも表れていると言及している³³⁾。

ここで一度当写本と宮廷派から離れ、9世紀中頃に制作され、宮廷派の影響を受けているとされる、フルダ写本に注目する。というのも当写本はフルダ写本と多くの類似点が確認できるのである。フルダ写本は宮廷派、

28) プリスキアヌス序文は宮廷派写本の影響が指摘される BSB., Clm. Ms. 28561 や Erlangen-Nürnberg Uni. Bibl., Ms. 9 などのマインツやフルダ制作の福音書にも採用されているが、それ以外のカロリング写本には管見の限りでは多くは見られない。この序文はカール大帝の宮廷における神学思想との関連や、写本の挿絵の動機となり得ることが先行研究によって指摘される。代表的な研究を以下に挙げる。Walker, Robert, M., "Illustrations to Priscillian Prologues in the Gospel Manuscripts of the Carolingian Ada School", *Art Bulletin*, 30(1948), pp. 1-10; Brenk, art. cit. (n. 2); Saurma-Jeltsch, art. cit. (n. 20).

29) カロリング期に重要視された文字を金で書くことは、単なる装飾的な役割にとどまらず、神学的な意味を含んだ重要な要素であったとされる。宮廷派写本挿絵における文字の重要性に関する研究として、註20で言及したものに加えて、Diebold, William J., "Not Pictures but Writing Was Sent for the Understanding of Our Faith", *Die Handschriften der Hofschule Kaiser Karls des Großen*, (2019), pp. 17-36 も挙げられる。金文字の使用に関してはゴデスカルクが《ゴデスカルクの典礼用福音書写本》内の献呈詩でも言及している。(Mon. Germ. Hist. Poet. Lat. 1, p. 94)

30) 何らかの理由で金の代用として黄色を用いている可能性も否定できないが、当写本の全体的な質の高さに鑑みると、費用を抑えるため等の単純な理由であったとは考えにくい。

31) Brenk, art. cit. (n. 2), p. 667.

32) 両写本の3つの人物像の並びは異なっている。

33) Mütterich, art. cit. (n. 1), p. 26.

とりわけ現存していない写本を手本として用いた³⁴⁾と考えられている。

イニシアルの検討を行うと、ヴェルツブルク大学図書館の65番福音書(Würzburg Unibibl., M. p. th. f. 65、未完成品とされる) fol. 57v³⁵⁾及び66番福音書(Würzburg Unibibl., M. p. th. f. 66) fol. 74r³⁶⁾のマルコ冒頭イニシアルのINIの3文字は当写本のイニシアル装飾と同様の配置をしており、鍵状のイニシアルも類似している。特に前者の65番のNの空隙に描かれる植物装飾は背景の色こそ異なるが、当写本にも類似したモチーフが描かれている。ヴェルツブルク65番写本を、宮廷派のうち最も当写本と類似していると言及した《ハーレー福音書》と比較する。装飾の差異などは確認できるものの、イニシアルI下部が左にカーブしている形状や、双方とも中央にメダイオン装飾が施される類似が確認できる。この点で少なくともヴェルツブルク65番写本と《ハーレー福音書》は関係があると言えるだろう。ヴェルツブルク65番写本のルカ冒頭イニシアル³⁷⁾と当写本のものと比較を行うと、QVOという3文字の配置やQの帯部分の装飾の区分けが類似していることがわかる³⁸⁾。同じフルダ写本であるハルバーシュタット大聖堂46番写本のマタイ福音書冒頭イニシアルL³⁹⁾に着目すると、Lの縦の帯状部分に描かれている、幾何学的な文様は当写本のマルコ冒頭イニシアルIでも同様の装飾が共通していることも確認できる。

文字に関してはヴェルツブルク66番写本に注目すると、イニシアルが描かれるコラムのみ金文字で、それ以降は基本黒字で書かれ、当写本と一致する。

イニシアルにおける装飾や金文字の類似点から、フルダ写本と当写本、《ハーレー福音書》の関係性が指摘できよう。

しかし、フルダ写本の制作年はフラバヌス・マウルスがフルダ修道院院長であった時期(822-842)とされており⁴⁰⁾、これは当写本の推定制作年よりも後年であることから、当写本がフルダ写本に属することは考えられないだろう。F・ミュテリヒも後期フルダ写本への帰属には否定的であるが⁴¹⁾、当写本とフルダ写本との間に関係が無いと考えるべきではないだろう。

当写本は宮廷派との密接な関係を示しており、これはすなわちカール大帝を中心とした王国の中央が制作に関与しているという点で重要な写本であることは間違いがない。加えて《ハーレー福音書》を含め、フルダ写本との関係を指摘したが、パレオグラフィーやコディコロジーの比較は不十分であり、今後の課題としたい。

宮廷派内のミッシングリンクとしての可能性

テキスト面や装飾面の類似を通じて本稿では、カール大帝の宮廷周辺での制作が考えられる当写本を宮廷派の中に組み込み、同写本群の発展史⁴²⁾における位置づけを試みる。

当写本はイニシアル装飾の観点で考えると、主に《ハーレー福音書》を中心として、豪華本との類似が顕著であるように思われる。一方で、福音書記者像や装飾枠等の要素の欠如という点では余白本と類似しているよ

34) 例えば Westphal, art. cit. (n. 1), pp. 137-38. フルダ写本に関しては Mütterich, Florentine, "Die Fuldaer Buchmalerei in der Zeit des Hrabanus Maurus", *Studies in Carolingian Manuscript*, (2004), pp. 374-416 に詳しい。カロリング期におけるフルダ修道院についての研究は Martin, Thomas, "Kloster Fulda und Karl der Große: Betrachtungen über eine Wechselbeziehung zu gegenseitigem Vorteil", *Fulda in den Künsten*, (2015), pp. 30-43.

35) Würzburg, Uni. Bibl., M. p. th. f. 65, fol. 57r <<http://vb.uni-wuerzburg.de/ub/mpthf65/pages/mpthf65/115.html>>.

36) Würzburg, Uni. Bibl., M. p. th. f. 66, fol. 84r <<http://vb.uni-wuerzburg.de/ub/mpthf66/pages/mpthf66/147.html>>.

37) Würzburg, Uni. Bibl., M. p. th. f. 65, fol. 87r <<http://vb.uni-wuerzburg.de/ub/mpthf65/pages/mpthf65/175.html>>.

38) ヴェルツブルク66番写本はQの形がqであり、形状の差異が大きい。しかし、空間部にVOを縦に書き込む配置は一致する。

39) Halberstadt, Dommuseum, Hs. 46, fol. 16r. 図版は Mütterich, art. cit. (n. 34), p.395 を参照。

40) Westphal, art. cit. (n. 1), p. 135.

41) Mütterich, art. cit. (n. 1), p.25.

42) 宮廷派(Hofschule)という語や、それに属する写本の制作における発展史的な捉え方は近年L・ニーズらによって疑問が投げかけられている。例えば Nees, Lawrence, "Networks or Schools: production of illuminated manuscripts and ivories during the reign of Charlemagne", *Charlemagne: les temps, les espaces, les hommes*, (2018), pp. 385-407. W・ケーラーは Koehler, op. cit. (n. 2), p. 11 において、宮廷派写本の出自は十分な根拠に欠けるとしつつも、その豪華な装飾や修道院の財産記録、カール大帝の死と同時に活動が見られなくなるなどの点からカール大帝の宮廷への帰属を支持している。

うに思われ、当写本は宮廷派内でも豪華本及び余白本双方の特徴を有していると言えるだろう。さらに宮廷派との類似に加え、フルダ写本とも共通点が少なからず存在することが確認できた。これらの類似性から、筆者は宮廷派内における当写本のミッシングリンクとしての可能性について提示したい。

余白本である《アダ本 A》や《アーセナル 599 番》は宮廷派内でも早い段階での制作が想定されており、当写本は挿絵や装飾の観点からそれらと同じ系統に属しつつも、イニシアルにおける装飾や字体から豪華本系統の特徴も併せ持つ。このことから当写本は余白本と豪華本の分岐点に存在するミッシングリンクとして考えられえるのではないだろうか。《ゴデスカルクの典礼用福音書写本》には福音書記者像やキリスト像が見られたが、後の《アダ本 A》、《アーセナル 599 番》では人物像自体が描かれなかったことから、福音書記者像の描かれぬ当写本は、それら余白本と同時期の制作が想定され、少なくとも 8 世紀末頃の制作とされている豪華本の《ハーレー福音書》や《アブヴィル福音書》以前の作例であることが想定できよう。さらには当写本とフルダ写本において、マルコ及びルカ冒頭イニシアルの構成や装飾パターンの類似、金文字の使用法の共通点等に鑑みると、フルダ写本の手本として想定されているが、現存しない宮廷派写本にも影響を与えていることも考えられる。しかし、これに関しては作品が現存しない以上、想定域を出ず、現存部分による詳細な検討が必要である。そのため、現時点では当写本を、現存しないもののフルダ写本の手本となった宮廷派写本の祖型として、さらに《ハーレー福音書》と近い繋がりを持ち、場合によっては同一の「手」による制作の蓋然性がある、という指摘に留める。

結論

本稿では当写本に関して、イニシアル装飾及びテキスト、字体等の観点から、宮廷派写本との比較を行った。イニシアル装飾では、金ではなく黄色による着彩等の差異は見られるものの、組紐文様の使用や、マルコ冒頭のイニシアル I に描かれる胸像メダイオンが宮廷派豪華本グループ、中でもとりわけ《ハーレー福音書》と類似することを確認した。採用されているテキストは欠損部分については不明であるが、プリスキリアヌス序文を含め、現存部分は宮廷派福音書と共通している。

一方で文字の観点から比較を行うと当写本は、一部福音書の冒頭を除き、金文字ではなく黒色で文字が書かれるという点で、他の宮廷派とは大きく異なるといえる。これは先行研究でも指摘されている、宮廷派写本の神学的、政治的に重要である文字への装飾性が失われているということである。同時に、テキストが方形枠で囲まれず、福音書記者像も描かれぬ点でも装飾性は失われている。方形装飾枠や福音書記者像の不在という点では余白本と共通する特徴である。他方、字体の使い分けは、豪華本との近似性が見られる。

これらの事実から、当写本を宮廷派へ帰属させることを支持したい。少なくとも宮廷と関係が深い人物が関係し、宮廷スクリプトリウム、もしくは宮廷とつながりの強い修道院のスクリプトリウムによって制作がなされ、宮廷派との関係が非常に強いことを疑う余地はない。

さらにはイニシアル装飾や金文字の比較から、《ハーレー福音書》を含め、当写本との共通性について言及した。以上を踏まえ、宮廷派の発展史的な文脈において、当写本をどのように位置付けるかについて考察を行った。すなわち、当写本は余白本の系統に属しつつも、豪華本系統への分岐点の作例であり、とりわけ《ハーレー福音書》と密接な関係を持つ写本である。また、後の 9 世紀後半に制作されるフルダ写本のモデルと想定される宮廷派写本の祖型として用いられた可能性も指摘した。

当写本は欠損ページが多く、未だに明らかでない点が多い。加えて、宮廷派写本の現存作例が少なく、筆者が指摘したように、当写本が宮廷派内のミッシングリンクとなりうるのか、またフルダ派の手本となった宮廷派写本の祖型となり得るのかを断定することは非常に難しい。今後コディコロジーやパレオグラフィーの観点からより詳細に検討していくことが課題である。

図版出典

【図 1】 München, Ludwig-Maximilians Uni. Bibl., Ms. Cim. 1, fol. 15r, "Open Access LMU", <<https://epub.ub.uni-muenchen.de/10622/>>. (2022 年 7 月 26 日最終アクセス)

- 【図 2】 München, Ludwig-Maximilians Uni. Bibl., Ms. Cim. 1, fol. 52r, "Open Access LMU", <<https://epub.ub.uni-muenchen.de/10622/>>. (2022 年 7 月 26 日最終アクセス)
- 【図 3】 Abbeville, Bibl. de la Ville, MS. 4(1), fol. 67r, "BnF Gallica", <<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b55005654j/f137.item>>. (2022 年 7 月 26 日最終アクセス)
- 【図 4】 Paris, BnF., Ms. Lat. 8850, fol. 82r, "BnF Gallica", <<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8452550p/f173.item>>. (2022 年 7 月 26 日最終アクセス)
- 【図 5】 Paris, BnF., Ms. Lat. 8850, fol. 81v, "BnF Gallica", <<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8452550p/f172.item>>. (2022 年 7 月 26 日最終アクセス)
- 【図 6】 London, Brit. Libr., Ms. Harl. 2788, fol. 72r, "The British Library MS Viewer", <http://www.bl.uk/manuscripts/Viewer.aspx?ref=harley_ms_2788_fs001r>. (2022 年 7 月 26 日最終アクセス)